



CONTENTS

巻頭寄稿	1
研究活動の紹介	2~5
静岡国際オペラコンクール	6
夏季手づくり公開工房	7
インフォメーション	8

静岡文化芸術大学 文化・芸術研究センター
 静岡県浜松市中区中央2丁目1-1 〒430-8533
 ●Tel: 053-457-6113 ●Fax: 053-457-6123 ●http://www.suac.ac.jp/

A r t & C u l t u r e



文化政策学部芸術文化学科長
平野 昭
 Akira Hirano

フィルハーモニー精神の育成と パトネージの要請

この11月に第5回静岡国際オペラコンクールが開催される。そして来年、2009年には第8回浜松国際ピアノコンクールが控えている。いずれもジュネーブに本拠を置く国際音楽コンクール世界連盟加盟のレベルの高いコンクールだ。オペラコンクールが1996年から、ピアノコンクールが1991年からそれぞれ3年毎にアクティシティ浜松を会場として開催されている。現在日本には〈国際〉と冠された音楽コンクールが7つあるが、世界連盟に加盟しているのは宮城県仙台市で開催されているピアノとヴァイオリンの協奏曲によるコンクールと、浜松市開催の上記ふたつのコンクールだけである。いずれの категорияもアジア地域における唯一の世界連盟加盟コンクールであり、予選参加者は世界数十カ国数百人に上っている。

浜松で行われるふたつの国際コンクールはそれぞれ関連イベントとリンクしている。オペラコンクールにはプレ・イベントとして県民オペラが、一方、ピアノコンクールには、コンクールと直結するものではないが前年度開催されるピアノアカデミーがある。また、ポスト・コンクールとしての1年間には入賞者によるガラ・コンサートやリサイタルも開かれる。つまり、浜松では3年間のうちに2回のコンクールが開催され、その前後にさまざまな関連イベントが実施される。これだけを見ると市当局が音楽都市を標榜したくなるのも頷ける。しかし、「音楽の都」としての重要な条件が満たされているとはいえないのが現状である。

その条件とは、コンクールの認知度とコンクールに対する認識、さらには言えば、音楽芸術に対する愛着だ。コンクールに限ったことではない。日常的に行われているクラシック音楽のコンサートに見られる観客動員の少なさに如実に現れている。大中のふたつの立派なコンサート・ホールを有するアクティシティ浜松が年間に開催するクラシック・コンサートの数は全国政令指定都市17市の中で最も少ない。ほとんどの政令指定都市はそこをレジデントとして毎月のように定期演奏会を開くプロ・オーケストラをもって、そうした演奏団体は浜松にはない。観客動員が見込まれず、したがってオーケストラを運営・管理維持する経済的基盤が確保できないからなのか、あるいはその逆なのか。質の高いプロ・オーケストラが毎月定期演奏会を行えば、自然に市民の聴衆が増えるのだろうか。そうではないだろう。

それにしても気がかりなのは、世界的な知名度を上げつつある国際コンクールを二つも擁しながら、プロのオーケストラがない都市があるという現実だ。

チャイコフスキーのモスクワにせよ、ショパンのワルシャワにしても、あるいはミュンヘンやジュネーブのような世界トップ・クラスのコンクールを開催している都市と浜松ではコンクールに対する市民の姿勢や眼差しが全く異なることを知らなければならない。しかし、その違いはコンクール成り立ちの原点に起因している。歴史あるヨーロッパの音楽コンクールは、明確な目的をもった音楽人の情熱と要望によって生まれたものである。いわば、音楽的に必然的な理由から生まれたコンクールなのだ。一方、浜松のオペラコンクールは「静岡ゆかりの世界的オペラ歌手三浦環没後50年」を記念して静岡県が創設したものであり、ピアノコンクールは「市制80周年を記念して楽器の町から音楽の町へ」を標榜した浜松市の文化政策によって創設されたものである。いずれもお上主導で始まったコンクールであり、そこには地元音楽人や市民の熱い要望とか懇請があったわけではない。

例えば、仙台のコンクールは、伊達政宗による開府から400年を迎えた仙台市が中心となって開設したものだが、2001年の第1回に到達する3年前から地元の音楽家や音楽教師たちが、多くの専門家たちからアドバイスを受け、協議を重ねて企画準備していたものである。さらに地元のプロ・オーケストラである仙台フィルハーモニーの全面協力を得ることで、世界的に類を見ない「協奏曲コンクール」としたことが何よりも市民の大きな誇りとなっていることも見逃せない。仙台でのコンクールに見られるボランティアとしての市民サポーターには「杜の都仙台・楽都仙台」の音楽文化を誇りに思う市民の生き生きとした表情が窺えるが、そこには今や全国の音楽ファンの垂涎的となっている「仙クラ」、つまり「仙台クラシックフェスティバル」の運営スタッフに見られるのと同じ情熱が漲っている。「仙クラにはコンセプトはありません。聴いてくれる皆さまが主役です。3日間朝から晩まで地下鉄沿線4箇所10会場で100のコンサートを1000円で」の出演者は世界的に活躍しているアーティストたちだ。また、仙台市では市の目抜き通りであるケヤキ並木周辺を会場とした「定禅寺ストリート・ジャズ・フェスティバル」が毎年9月中旬に前夜祭を含めた3日間開催されている。数百の参加バンドが約100ステージを飾る催しで、今年は第18回目を迎えている。国際コンクールと仙クラ、そして定禅寺ジャズ・フェスという全く異質なイベントながら、運営スタッフとして、あるいは聴衆としての市民の積極的参加の姿勢には共通したベクトルの向きと大きさを感じるのである。つまり、お上から下されたものではなく、市民が創り上げてゆくという方向性をもったエネルギーである。

こうした仙台の取り組みを見ると、その根底に「フィルハーモニー精神」を見ることができる。「音楽の都浜松」にとって必要なのはまさにこのPhilharmony精神であろう。phil(愛する)+harmony(音楽)こそ、音楽文化向上の鍵であり、そして芸術を支援、支持するという意味でのPatronage、経済的後援者としてのパトロンこそ音楽文化活性化の原動力となるにちがいない。日本におけるアートマネジメント研究の拠点として浜松に立地する本学に課せられた役割の大きさを今いちど考え直さなければならない。

(平成19年度学長特別研究)

持続可能な社会のためのデザイン

Design for Sustainability

宮川潤次 (デザイン学部空間造形学科)

7月に開かれた洞爺湖サミットでは、世界が直面している地球温暖化の原因となっている二酸化炭素などの温室効果ガスの排出を2050年までに半減するために全世界が協力して取り組むことが宣言されました。世界中で気候変動による大規模な干ばつや洪水などの災害が起き、多くの人々が苦しんでいます。人口増加による水や食料、エネルギーの不足も、貧困地域における飢餓や資源を巡る紛争を拡大するものと危惧されています。また、日本国内では、急激な高齢化と少子化の進行が、脆弱な社会保障や雇用システムの欠陥を明らかにしました。

1972年にストックホルムで開催された「かけがえのない地球(Only One Earth)」をテーマにした地球人間環境会議は、先進国の取り組みが経済発展重視から環境保全に変わった大きな転機でした。その後、1992年のリオ環境サミットでは、“Sustainable Development”の実現に向けた全世界的な合意とその実行計画「Agenda21」が合意されました。

サステナブルデザインは、このような持続可能な社会づくりを支えることを目的とした、「エコデザイン+ソーシャルデザイン」の考え方に基づく新たなデザイン運動のひとつです。この場合のソーシャルデザインには、コミュニティづくりやユニバーサルデザインの考え方も含まれています。静岡文化芸術大学では、2006年にデザイン学部教員が中心となって「サステナブルデザイン研究会」を設立し、基礎的な研究とともに啓発的な活動を始めました。そのいくつかをご紹介します。

●公開研究会の開催

平成18年から19年にかけて、情報交流と市民啓発を目的とした公開研究会を開催しました。第1回は「持続可能な社会とエコデザイン」をテーマに、本学非常勤講師の林昭男先生に、エコデザインの理論と実践、環境共生建築の事例や自らの設計活動、エコデザイン普及のための課題などをお話いただきました。第2回は、「LOHAS概論」として、NPO法人日本ローハスクラブの藤崎謙吉氏に、1980年代から米国中部で広がった自然志向ライフスタイル層をターゲットとしたLOHASビジネスコンセプトについて、概要と日本での展開の可能性等について伺いました。第3回は、「風と風車の話」。自らを風車の伝道師と名乗る松本文雄氏(松籟技術研究所代表)に、大気の流れ、地形や季節による風の変化、風車の歴史や風力発電の技術、再生可能エネルギーとしての風の利用などについて伺いました。

●「自転車のまちづくり」共同研究

平成19年度から、浜松市、遠州鉄道、NPO法人日本都市計画家協会他と共同で地域公共交通ネットワークに関わる研究を行っています。自動車に過度に依存する生活を見直し、バスや鉄道などの公共交通と中間的な交通手段としての自転車の利用を進めることを目的としています。具体的には「自転車のまちづくりフォーラム」の開催や浜松市駅南地区を対象とした「自転車マップ」づくりを進めています。(写真-1 自転車のまちづくりフォーラム)



写真-1 本学で開催された「自転車のまちづくりフォーラム」の様子

●eco-SUAC 2008

学生や教職員が主体となって大学をエコキャンパスに変える活動です。平成20年6月に行われたスタートミーティングには約30名の学生が集まって、6つのエコプロジェクトを提案しました。現在、いくつかが試験的に実施されています。

<エコプロジェクト>

1. 緑のカーテン
教室や研究室の窓を、ゴーヤなどの緑のカーテンで覆って、室内温度を下げる活動。空間造形学科の教室で試行中。(写真-2 緑のカーテン)
2. エコリンコ(自転車リサイクル)
毎年学内に放置される自転車を補修して再利用する活動。
3. ゴミ箱デザイン
楽しく、容易にゴミ分別できるゴミ箱のデザイン提案など、ゴミの減量・資源化に関わる活動。
4. 不要品リサイクル
学生や教職員の不要品、保管期間が過ぎた遺失物のリユース・リサイクル活動。
5. エコ風呂敷
古着や傘をリサイクルした風呂敷の制作や普及活動
6. エコファッション展参加
8月にSBSが主催するエコファッション展への参加作品制作



写真-2 教室に設けられたゴーヤの「緑のカーテン」

■今後に向けて

世界が直面する環境悪化や社会的な不均衡の問題などの解決に向けて、世界中の人々が協力して対応することが求められています。サステナブルデザインは、それらの活動の目標となるイメージづくりや具体的なシステムづくりの面で重要な役割を果たし得るものであると考えています。また、単なる調査研究や評論に終わるのではなく、実践的な活動によって地域社会を動かすことも重要だと考えています。

特別研究紹介 2

(平成19年度学長特別研究)

地域社会とパブリックアート

森 俊太 (文化政策学部文化政策学科)

パブリックアートとは、美術館やギャラリー以外の公共的な空間に設置された芸術作品を指し、公共空間の魅力を高める目的を持つ。また設置された都市や地域の歴史や風土、住民意識などを表現し、まちづくりを促進したり、都市の文化的価値を高める効果もある。本欄で紹介する研究の目的は、パブリックアートについて、空間デザイン、インタラクティブアート、社会学という異なる分野に属する3人の研究者が国内外の先進的事例を研究し、浜松を中心とした地域の活性化に資するパブリックアートの素案を作成することであった。本稿では調査の一環として訪れた、米国シカゴ市の中心市街地にある代表的なパブリックアート作品群について述べる。シカゴは摩天楼で有名であるが、様々なタイプのパブリックアートが設置されていることでも世界屈指の都市である。さらに、都市の発展とそれに伴う社会変動に関する研究が盛んでもあり、都市社会学のメッカとしてもよく知られる。

シカゴのパブリックアートは次の三種類に分類できる。それぞれは作品としての外形的な特徴だけでなく、異なる時代背景、設置目的・経緯、影響・効果を持つ。第一は、経済成長と拡大を続ける都市のシンボルとしての機能を担うもので、「近代型」パブリックアートといえる。政府機関や企業が、ビルの敷地内や広場などに鑑賞する目的で設置した、著名作家による彫刻やモニュメントなどの大型のアートが多い。例としてはピカソ(写真1)、ミロ、カールダー(写真2)などの世界的作家による作品がある。



写真1



写真2

第二は、多文化共生社会の推進など地域住民による社会運動や、地域社会の歴史的エピソードを表現しているもので、基本的に地域住民が参画して完成させる「地域住民参画型」パブリックアートである。シカゴの公共施設や学校などには壁画やモニュメントが多数存在するが、それらの多くは、大恐慌後の1930年代、政府の芸術家支援策の下、美術家が地域の意向を踏まえて制作したもので、アフリカ系アメリカ人やその他さまざまな国や地域か

らの移民が、自分たちの文化・歴史を表現したものである。

第三に、新しいタイプのパブリックアートとして、2004年に開園した摩天楼とミシガン湖を望むシカゴ中心に位置する大規模都市型公園「ミレニウム・パーク」に設置された様々なパブリックアートを挙げる事ができる(写真3「クラウン・ファウンテン」、写真4「クラウド・ゲート」)。



写真3



写真4

これらは、先端技術の効果的活用や新しいインタラクティブ性の実現などで、作家の作品でありながら住民との深い関係性、関連性を実現している「現代型」パブリックアートといえる。これらは、前者の二つの種類の特長を融合するものであり、都市住民、郊外に居住するが市中心部で働く中高所得者層、そして国内外の観光客など、今まで交流する機会の少なかった人々を、芸術作品を通じて出会わせて、互いに楽しませる効果を持っている。

以上のシカゴのパブリックアートの考察を踏まえると、将来、浜松に設置するパブリックアートとしては、次の二つの効果が期待できるタイプに特に意義があると考えられる。第1は合併により広域化した異なる地域の住民意識の連帯をデジタル技術で強める目的を持つアート、第2は浜松市中心市街地における旧市街地と東地区を同じくデジタル技術で連携するアートで、地域住民、買い物客などの通行人、観光客、本学や周辺学校の学生達など様々な人々を結び効果を持つものである。今後も、浜松を念頭に置きながら、学際的な視点からパブリックアートについての考察を続けていきたい。

*本研究は下記研究者による共同研究として実施された。
代表研究者: 森俊太 (文化政策学部文化政策学科、本稿文責)
共同研究者: 川口宗敏 (デザイン研究科長、デザイン学部空間造形学科)
的場ひろし (デザイン学部メディア造形学科)

(平成19年度学長特別研究)

「世界のバリアフリー絵本展」を開催して

林左和子 (文化政策学部文化政策学科)

平成19年度特別研究「IT技術を利用した新しい図書館の研究」では、図書館ならびに学習環境の改善につながる新しい図書館システムを構築していくことを目的とし、学生をはじめとする利用者がさらに図書館を利用してくれるようになることを目指している。

しかし図書館の利用においては、システム面だけではなく、利用者自身の興味や関心、好奇心を呼び起こし、探索意欲を高めるための働きかけも必要であろう。こういったことを考慮して、展示会の開催に取り組む大学図書館が増えてきた(※1)。学生だけでなく一般の市民も対象とした展示会は、図書館資料への興味や関心を引き起こすことができるだけでなく、大学の活動を知ってもらう機会であり、見学者とのコミュニケーションの場ともなりうる。

他大学図書館での実践を参考に、2008年3月8日～3月23日に、研究の一環として「世界のバリアフリー絵本展」を開催した。学外者への情報発信やコミュニケーションの場とすることを考え、会場は浜松市立城北図書館の一室とし、浜松市立図書館との共催事業とした。バリアフリー絵本とは、障害のある子どもと一緒に楽しめる絵本(さわる絵本や点字つき絵本、やさしく読める本など)や障害のある子どもについて書かれている絵本のことである。国際児童図書評議会(IBBY)障害児図書資料センターが2005年に選定した世界各地のバリアフリー絵本40点を借り受け、本学図書館や教員が所蔵しているバリアフリー絵本及びDAISY図書などととも展示した。本学のユニバーサルデザインの授業風景も放映、学生の手作り絵本や大学図書館の紹介コーナーを設け、学生アルバイトが展示品の説明やアンケートのお願いを担当した。

開催期間中の入場者は838名であった。最初のうちは、城北図書館への来館者がついでにのぞいていくケースが多かったが、新聞に取り上げられたことや既に来場した人から紹介されたなどで、この展示会を目的に来館する人も増えてきた。アンケートによれば、バリアフリー絵本やDAISY図書をはじめて見た人が多かったようである。

DAISY図書とは、最初は視覚に障害のある人たちのために、テープに代わるデジタル録音図書として開発されたものである。その後、音声と画像、テキストをシンクロさせたマルチメディアDAISYが登場した。ディスレクシアなど読みの障害を持つ人にも利用してもらえるものとなっている。

しかしこういった機器の存在がそれを必要としている人たちに必ずしも届いているとは限らない。この会場でも、熱心にDAISYについて質問してこられた方が何人かいた。こういった資料の存在を知ってもらうことができたのは、展示会の成果といえるであろう。またこれまで本学を訪れたことのない人に、大学のユニバーサルデザインの取組を知ってもらうきっかけにもなった。さらに、展示品の説明や質問への対応などをきっかけとして来場者とコミュニケーションをとることができ、教えられることも多かった。

今後は、こういった特別な場所での展示会だけでなく、大学図書館の通常のスペースでの展示・本の紹介ができないかを考えていきたいと思っている。さらにweb上での資料の紹介や探索の仕組みについても検討することで、図書館を活用してもらえる環境をつくることを目指していきたい。

特別研究「IT技術を利用した新しい図書館の研究」

研究代表者 花澤信太郎(デザイン学部空間造形学科)

共同研究者 的場ひろし(デザイン学部メディア造形学科)

和田和美(デザイン学部メディア造形学科)

林左和子(文化政策学部文化政策学科、本稿文責)

(※1) 木戸浦豊和ほか「展示会からはじまる大学図書館の新たな可能性」『大学図書館研究』35(2007.8)p.33-42



特別研究紹介 4

(平成17年度デザイン学部長特別研究)

超軽量3輪電気自動車の研究開発

羽田隆志 (デザイン学部メディア造形学科)

1. 実験車両「T3」開発の意図

電気自動車の普及を遅らせている理由は、製造コストの高さ、充電時間の長さ、一充電走行距離の短さです。パワー不足という問題はありません。現在の電気モーターは十分な出力があり、ガソリン車を凌ぐ加速力をも発揮します。問題点は全てバッテリーに起因すると言えるため、実用に足るバッテリーの実現に向けて大きな資本と多くの人材が投入されています。

では私たちは新しいバッテリーの完成を待つことしかできないのでしょうか。そこでバッテリーそのものの開発以外に電気自動車の普及に貢献する方法を考え、下記のポイントを追求し実験車両T3を開発しました。

- ・ 製造コストの低減とメンテナンス性の向上を目指し、特殊な材料を用いない。
- ・ 部品点数を減らし、車両重量の軽減を図るため、できる限り簡素な設計とする。
- ・ ユーザーの所有欲を喚起するため、魅力あるデザインを実現する。

省エネと二酸化炭素削減のために仕方なく選ぶ存在ではなく、乗りたくなるクルマを目指しました。また公道での走行実験が必須と考え、登録及び保険加入が可能なスペックを遵守します。

2. コスト低減と軽量化を両立するために

電気自動車の動力であるモーターは、コントローラーによって電流が決められ、回転数が制御されます。モーター及びコントローラーの性能は電力の消費率に影響を与えます。今回はこれらの開発はせず、市販の電動バイクのものを流用します。

重要保安部品であるブレーキは大型オートバイのものを流用します。このブレーキは車重が遙かに重いオートバイを十分に制動する能力があるため、T3の制動能力は1000ccクラスのオートバイを凌いでいます。オートバイ用部品は安価で入手やすく、乗用車用より軽量なため超小型電気自動車に適しています。

変速用のギヤボックスは省略します。効率が低下することと部品重量が重いからです。車輪の重量も大きな割合を占めるため思い切って3輪車とします。操舵時及び制動時の安定を保つためフロント2輪リヤ1輪の3輪です。モーターも高価であると同時に重量も重いため、1輪しかない後輪に小型モーター1個を内蔵するインホイールモーター形式を採用します。軽量であれば1個しかないインホイールモーターでの走行も可能であると判断したのです。

3. 設計の要点

フレームは専用設計で、競技自転車用のクロモリパイプ製です。非常にシンプルな構造で製造も容易です。

多くの部品をオートバイから流用したため、特に安全性と操縦性に直接影響し、最も設計に苦勞を強いられるのがアップライトと呼ばれるフロントタイヤの軸受け部分の部品です。オートバイ用部品は、フロントも1輪であることが前提で設計されているためです。

灯火類は全てLEDを使用し消費電力を抑えます。動力用のバッテリーは軽自動車用の安価な鉛バッテリー4個を直列に繋ぎ、48Vで使用します。

最終的に、タイヤ、アルミホイール、ブレーキ、ブレーキロータ、サスペンションユニットなどを市販オートバイ用から流用し、シートのみ乗用車用を使用しました。

4. 魅力を身に纏うために

デザインはユーザーにアピールする最も重要なポイントです。誰が見ても魅力的な外観を実現し、「小さい=おもちゃ」という概念からの脱却と、ガソリン車との比較から来るチープ感を払拭することを狙いました。

T3のデザインは、高梨廣孝氏(本学デザイン学部元教授)が製作したスケールモデルを可能な限り忠実に再現しました。高梨元教授の経験と造詣の深さが、多くの人たちにアピールするレベルの高いデザインを生み出しています。



T3主要諸元

全長:2500mm 全幅:1300mm 全高:850mm
 重量:137.9kg =車両本体:95.9kg+バッテリー:42kg(乗用車用鉛バッテリー4個)
 最高速度:約45km/h 走行距離:約40km/1充電 充電時間:約8h(家庭用100v)

※将来的にはLi-ionバッテリーへの換装によって大幅に性能向上します。

第5回静岡国際オペラコンクールに向けて

静岡国際オペラコンクール実行委員会事務局

世界中から集まった若手オペラ歌手約80名がその実力を競い合う「第5回静岡国際オペラコンクール」(主催:静岡県、静岡県教育委員会、浜松市、本学他)が11月1日(土)から9日(日)までアクティシティ浜松大ホールを会場に11日開催されます。

本コンクールは静岡県ゆかりのオペラ歌手三浦環をたたえ、没後50年にあたる1996年から3年ごとに開催しています。

出場者のレベルの高さや審査の厳正さで、回を重ねるごとに世界的に評価を高め、2003年には声楽分野のコンクールではアジア初となる国際音楽コンクール世界連盟への加盟が実現しました。

世界30カ国以上306名の応募者の中から、予備審査(6月2~5日、本学会場)を経て参加が認められた出場者は、第1次予選で自分の得意とするアリアを2曲歌います。オペラの名アリアの数々を一度に鑑賞することができるため、オペラファンの方にも、またオペラが初めての方にも十分に楽しんでいただけます。

続く第2次予選では、出場者がオペラの一役を自選し、指定された箇所を約20分間歌い演じます。これは世界の声楽コンクールの中でも数少ない審査方法で、出場者の発声技術や表現力はもとより、オペラ歌手としての経験も同時に問われる難度の高い課題となっています。オペラの1シーンを堪能されたい方にお勧めします。

そして、2つの予選を勝ち残った6名が、オーケストラ・ピットに入った現田茂夫氏率いる東京フィルハーモニー交響楽団の演奏で、本選の最終審査を受けます。ステージには出場者のみが登場し、本物のオペラの上演形態に近づいた、緊張感みなぎる演奏が繰り広げられます。

これまでのコンクール出場者から、英国王立歌劇場で東洋人初の主演に抜擢されたダイ・ユークャン(第1回最高位・テノール・中国)、ニューヨーク・メトロポリタンオペラ『戦争と平和』のアンドレイ公爵役で絶賛を博したワシリー・ラデック(第4回第1位・バリトン・ロシア)など、世

界の歌劇場で活躍される歌手を数多く輩出してきました。

今回の出場者の中からも、本コンクールを機に、静岡から世界へと羽ばたく歌手が生まれることを期待しています。コンクール会場でその歴史的瞬間を共にし、未来のスーパースターの誕生を見届けてください。



予備審査風景



第4回表彰式風景

チケット案内(発売中)

開催区分	席種		価格		チケットぴあPコード
第1次予選	一般	自由	1階席	¥500(各日)	
11/1(土)~11/3(月・祝)	学生	自由	1階席	無料(大学生以下)	
アクティシティ浜松 大ホール		開場 13:00	開演 13:30		
第2次予選	一般	自由	1階席	¥1,000(各日)	
11/5(水)~11/6(木)	学生	自由	1階席	無料(大学生以下)	
アクティシティ浜松 大ホール		開場 13:00	開演 13:30		
本選 11/9(日)	一般	指定	1階席	¥2,500	
	一般	自由	3・4階席	¥1,500	
	学生	自由	3・4階席	¥500	
アクティシティ浜松 大ホール		開場 12:45	開演 13:30		
通しバス券 (公式プログラム付)	一般	予選自由 本選指定	1階席	¥5,000	782-096
入賞者記念コンサート静岡公演 11/11(火)	一般	自由	全席	¥1,500	295-484
	学生	自由	全席	¥700	
静岡音楽館AOI		開場 18:30	開演 19:00		
入賞者記念コンサート東京公演 11/13(木)	一般	自由	全席	¥2,000	295-489
	学生	自由	全席	¥1,000	
紀尾井ホール		開場 18:30	開演 19:00		



2008年夏季 手づくり公開工房 開催

静岡文化芸術大学では、毎年、夏季と春季の2回、公開講座「手づくり公開工房」を開催しています。この講座は、高校生以上の一般市民を対象に、学内にある「自由創造工房」をはじめとするいくつかの工房を使って、「手づくり」の作品製作を、実習を通して学んで頂くものです。

毎回の講座には、木材や金属、テキスタイルなどの作品製作やスケッチ、デッサン等4～5種類の「工房」が設けられ、本学デザイン学部の教員などを講師に、それぞれ1日あるいは2日の工程で、参加者自らの手づくり作品を完成させていきます。

今回の夏季講座では、「フローリング材を使ってサイドテーブルを作る」(デザイン学部生産造形学科 田邊英隆)、「石こう像の木炭デッサン」(デザイン学部空間造形学科 鳥居厚夫)、「光具 ピンホールカメラ」(デザイン学部メディア造形学科 佐藤聖徳)、「アルミ・ネームプレート」(デザイン学部生産造形学科 山本一樹)、「テキスタイル<手織り>」(外部講師:種村興治、桑原壽子)の5種類の工房が設けられ、受講生は合計で約60名に上りました。

各工房では、まず担当の講師から、材料や製作物、

製作工程などに関する基礎知識の説明があり、その後、それぞれの作品製作に取り掛かりました。木工や鋳造を行う工房では、木工機械や600℃以上の高温で溶けた金属の取り扱いなど、作業の安全に関する注意事項も聞きながら、慎重に作業が進められました。今回、初めての体験という受講生も多く、創作過程では、いろいろと苦労もあったようですが、皆さん、自分の作り上げた作品にはそれぞれ満足感を得られている様子でした。

今回のように本学教員などが講師を務める「公開工房」は通常、年2回開催され、次回は平成21年3月頃の予定です。若年者から高齢者までの幅広い市民が、工房での「ものづくり」を体験できる環境は地域のパブリック・スペースとして、大きな意義を持つものであり、「自由創造工房」がその役割の一端を担えるよう、今後も公開講座の一層の充実や日常の運営にも工夫を重ねていきたいと思ひます。

文化・芸術研究センター



「光具 ピンホールカメラ」



「フローリング材を使ってサイドテーブルを作る」



「石こう像の木炭デッサン」



「アルミ・ネームプレート」



「テキスタイル<手織り>」



「テキスタイル<手織り>」

前期

公開講座「“もてなし”の文化学Ⅲ ～豊かさ・楽しさ・おもしろさを求めて～」

- ・9月27日(土)「地域まるごと博物館」
～エコミュージアムとエコツーリズム～
講師：宮川潤次
(デザイン学部空間造形学科教授)
- ・10月11日(土)「公共図書館の裏側をのぞいてみる」
～図書館員のおもてなし～
講師：林左和子
(文化政策学部文化政策学科准教授)
- ・10月18日(土)「もてなす／もてなされるの関係」
～社会心理学から見て～
講師：福岡欣治
(文化政策学部文化政策学科准教授)
- ・11月1日(土)「愛されるロボットになりたい」
～家庭用ロボットの将来～
講師：宮田圭介
(デザイン学部メディア造形学科教授)
- ・11月8日(土)「椅子は人を選ぶ」
～あなたも椅子にきらわれないように～
講師：迫秀樹
(デザイン学部生産造形学科准教授)
- ・11月15日(土)「江戸のアメリカ人」
～揺れる幕末の日本と外交のおもてなし～
講師：佐野真由子
(文化政策学部芸術文化学科准教授)

【受講資格=高校生以上】

受講料=一般 1,000円 通し受講：全6回=4,200円 高校生=無料

特別公開講座「作句のたのしみ（仮題）」

講師：有馬朗人(予定)
(1月24日(土)、2月7日(土)予定)

※文化芸術セミナー「室内楽演奏会」以外はすべて静岡文化芸術大学にて開催します。

後期

公開講座「“多文化社会で生きる”」

- ・12月6日(土)「南米から人と文化を迎える」
～日系人社会と浜松～
講師：イシカワ エウニセ アケミ
(文化政策学部国際文化学科准教授)
- ・12月13日(土)「日本語を外国語として教える」
講師：広瀬英史
(文化政策学部国際文化学科准教授)
- ・12月20日(土)「多文化共生に向かう日本」
～韓国の変化を視野に～
講師：池上重弘
(文化政策学部国際文化学科教授)
- ・1月10日(土)「中東から国民国家を考える」
講師：徳増克己
(文化政策学部国際文化学科准教授)
- ・1月24日(土)「日本とビルマ(ミャンマー)」
～過去・現在・未来～
講師：田辺寿夫(外部講師 ジャーナリスト)

【受講資格=高校生以上】

受講料=一般 1,000円 通し受講：全5回=3,500円 高校生=無料

特別公開講座「新能」

- ・10月7日(火)第1夜「朗読劇」
 - ・10月8日(水)第2夜「能講座」
 - ・10月9日(木)第3夜「能公演」(演目：「松風」)
- 受講料=3,000円(高校生=無料)

文化芸術セミナー

- ・静岡文化芸術大学の室内楽演奏会
10月20日(月)名古屋(宗次ホール)
10月21日(火)静岡(しずぎんホール ユーフォニア)
- ・メディアアートフェスティバル 12月19日(金)～21日(日)

編集後記

第5回静岡国際オペラコンクールの開催を間近に控えた本号では、実行委員会事務局によるコンクールの詳細なインフォメーションに加え、巻頭で芸術文化学科の平野教授に国際コンクールについての寄稿をいただきました。「多様な文化の発展を担い、支える市民と都市」の研究は本学の共通テーマともいえるものでしょう。今後も本誌を通じてSUACの多彩な研究活動やイベントにご注目頂ければと思います。(St)

A r t & C u l t u r e

文化芸術
Vol.8

文化・芸術研究センター
ニュースレター

September 2008

発行人：上野征洋 編集人：富田晋司
発行：静岡文化芸術大学 文化・芸術研究センター
(事務局 静岡文化芸術大学 企画室)



古紙配合再生紙及び大豆インクを使用しています。